

フレンズの会コンサートによせて

「朝枝さんはどこが気に入って、松江に住むことに決めたのですか」と聞かれることが多い。きれいな町並みや静けさ等とわかりやすく答えることが多いが、実は次の2つのことが私をそう決断させた。ひとつは、長年の友人とその家族が松江で暮らしていたこと、そして彼らを通して松江在住の音楽家たちと、さらには彼らの友人たちと知り合ったこと。もうひとつは、私は彼らと共に活動できると直観したこと。この2つである。

松江を訪れてからの4年間を振り返ると、なんと沢山のひと々と知り合う機会を得、またご支援いただいたことであろうか。そして今回の松江城馬溜の野外コンサートを通して私は4年前の直観が正しかったことを理解した。今日は「フレンズの会」の皆様へ、心からの感謝を込めて、この「友人たち」と「活動」のことをお伝えしたいと思う。

私の中では漠然とであるが、3つの区分がある。生活のためにすることは「労働」であり、音楽家として、例えばモーツァルトの楽譜を研究したり、何かを発見したり等は「仕事」である。そしてもう一つが「活動」である。例えば昔、北海道に開拓に行った人々は、確かに新たな生活を求めたであろうが、しかしそれは労働を伴う活動であった。なぜならそこには開拓という神の御業に参画しているのだ、という意識があっただろうと考えるからである。これが私にとっての「活動」である。

すでに100年も前に、ドイツの音楽学者パウル・ベッカーは、「社会意識としての音楽は既になくなってしまった。私達は芸術生活ではなく、芸術産業しか持つことはできないのか」と警鐘を鳴らしているが、これを言うベッカーの頭には、教会の音楽家と貴族のサロンの音楽家とコレギウム・ムジクムと呼ばれた学生の音楽集団と、さらに民衆が一緒になってベートーヴェンの交響曲を演奏した当時、音楽の感動によってあらゆる身分を超えて一つになった共同体の記憶があった筈だ。活動は人を必要とし、社会性を帯びる。文化である。

人材と活動が分かち難くあるように、人と学習もその本質を共にする。学習は活動の最も大切な要素である。小学1年で私達は字を学習するが、その時の事を記憶している人はいない。しかし私達は現に字が書ける。これは学習がコンピュータの履歴のように記録されていなくてもその成果は残っているということだ。それは「獲得された能力」として確実にその人の中に存在する。学習のすばらしさである。

ベートーヴェンの音楽には本来、それを生み出した共同体の体験と記憶が積み重なっている。ベートーヴェンという一個人を超えた集団的記憶が時間をかけて涵養して来たものに現代の私達はそもそも接することが可能なのだろうか。

いつから音楽は娯楽になってしまったのだろうか。音楽家ももう音楽に没頭できなくなっている。私達はただ安全と幸福を求め、安易な趣味と娯楽の消費者になってしまっているのではないだろうか。音楽はもはや何かを内省させたり、啓示したりする力が無くなってしまった体をしている。それほど商品化されてしまったのだ。そこには計算された安定した惨憺な美しさがよそよそしく弱々しくある。失敗するかもしれないリスクを背負い、困難を乗り越えようという決心に到ったところの力強さがない。「何かに成る」ための苦しみが欠落している。

活動のもう一つの大事な要素は、「何かに成る」という展望である。私はヴァイオリンを弾くことでヴァイオリニストに成った。これからも「成って」いく。若い男女が結婚したからといって、夫婦に成ったわけではない。夫婦になることを始めただけなのだ。これからの長い年月をかけて、この男女は夫婦に「成る」。世界唯一の夫婦になるのだ。

アウグスティヌスの言葉、「神が人間を創った時、それは始まりであった」というのはまさにこの事を言う。

4年前に私達は「活動」を始めた。小さな始まりであった。この4年間、私達は学習した。音程が調和するという一つをとってもそれが技術の問題だけではなく、宇宙的な視点を持ってはじめて理解される事も理解した。私達は考えにおいても、演奏においても聖なる熱意と持続の力が正しい思想に導かれている時にのみ、それにふさわしい方法で課題を達成できることを知るに到った。

右も左も分からない幼児といえども偉大な賢者に対して開示すべき何かをもっているように、プロでない私達でも音楽を通して啓示に至ることが可能であることを体験した。活動する能力は新たな始まりを促し、根拠ある希望と信頼を生む。人間はしばしば本人でも予想していなかった驚くべき事をするものである。人類の歴史とはこの予測を超えて成し遂げた偉業の記録である。

松江城馬溜野外コンサートでは、午後4時からの第1部はプロの奏者なしでのコンサートだった。助っ人を必要としないほど成長したのだ。私はこのコンサートを通して、私達の獲得された能力を実感した。私は、私達が「仲間」になったことをも実感した。私はこれをとても光栄に思っている。私達の活動は、いずれ一つの基準を打ち立てるであろう。私がこの活動に参画できた事、それによって信頼と愛情を教化する事を許された事、そしてそれをサポートしてくださる「フレンズの会」の皆様とスタッフの皆様に、心からの感謝をささげたいと思う。

手結にて、2018年5月29日

朝枝 信彦